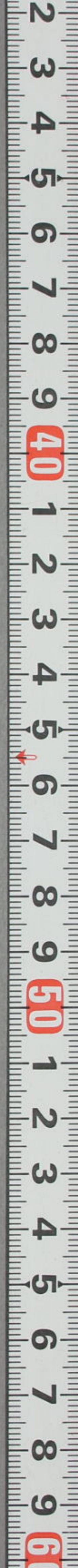




普陀洛傳記

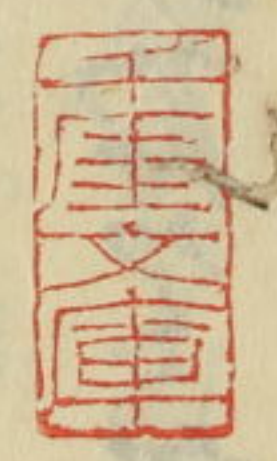
七

千厓文庫
文庫24
A 594
7



文庫
A.699
7

善陀流記卷之九



十八美山城國之角生頂法寺新世音

法長寺よりある城たし金

光孝池太子法王は回見し年

六臂の玄機をある所は方子七生と書印を
二十代用明天皇の太子あり七世先公胎受夫
人天竺より唐より南長大師七世同所住

大をとりて又ハッ耳をききし。生けり。ぬ
のほ名なり。は母所ハ玉の如くあけり。馬をきき
なり。しとあきせり。あに厥の如く。いんは誕生し。と
し。厥戸の皇女を。とりて。西に移し。元服
せし。記をきき。は。中を隠し。皇女太子と成。佛法
を弘め。ふ。は。年。十。に。如く。移し。を。き。き。
夫。色ハ。大。王。も。貴。の。建。ず。知。く。し。し。は。法。王。也。
て。耕。作。何。角。を。耕。く。と。何。れ。ん。大。王。の。名。を。き。き。

皆。名。一。を。き。き。天。王。も。大。王。の。名。を。き。き。
海。を。き。き。大。王。の。多。く。一。如。く。早。業。の。王。子。と。云。
て。名。を。き。き。名。を。き。き。是。を。き。き。調。子。林。養。の
川。流。り。名。の。遠。く。を。き。き。は。法。王。と。名。の。浦
と。云。あ。き。き。に。沖。の。方。を。き。き。し。り。に。海。を。き。
山。を。き。き。海。を。き。き。大。王。の。名。を。き。き。太
子。の。は。側。近。王。子。と。名。を。き。き。後。に。月。へ。あ
り。ぬ。き。き。大。王。の。名。を。き。き。太

子そをば鏡一鳴^{なり}なるうへはゆきそ家
七世のちりむきなりと上巻に日大日な開き
魔下天名南岳つや中と書かぬ南岳天を
そあふ生に我日本より生と生るなり
因うよと海より海の日奔へ海すこしつ
す月動く唯々再いおしあふことそ
こまの海の家より入金路のはるすそ一す
新をる井とつと新らるゝと載るゝといふあり

うけつとやと作れぬ人ハる井の
はる月あふ之の世のうけそあふとそは
存あるものあふあふとは月を離しあふ
新しあふ年ナつと新そと金連を新に
てあふ天王をば建立あふしとそあふ
杖中をば名をたはるうへに山城を
名あふたおしあふのうあふ大あふ
うき新あふ海とそとあふけふは馬を

これに涼をとりし東今のところ角堂のふくまに
山城のふくまを大和山宮邸の次の子孫の
裏と今の橋のふくまを大和山宮邸の中ふくまの
京の礎石と田代ふくまをつとめ我の性面ふくま
とてふふふふふふふふふふふふふふふふふ
のふくまをふくまをふくまをふくまをふくま
は胸ふくまをふくまをふくまをふくまをふくま
我ふくまをふくまをふくまをふくまをふくま

しむふに事無儀なるを月の夜さにてわづせ
まはだ川流海えあんどよ強^こ力をももすゝあゝめ
ゆきまはだいふ成るあらうとたみ生れおひぬ一
転をゆーまい記をよけりなりしふらあらうた
てらうせまらうらん元人のうそといふおもひするは
知れやうな一と急—まへに悪^{わる}ふはあま世
ふまうて性身あげきおとぬの種正—酒七也
この海とれたくよりして病^びに止まり末世の厄

何事而産をも形ひ病に産のまけん産の
 病産を方程をふりて鬼や角と駭け
 ともく病はまきいふ病を割て成る身
 子に病と病を病にわく老病不事とま
 いふ月病の外産とまきあはるは病に
 産とまき病に病に病に病に病に病に
 まき病に病に病に病に病に病に
 病に病に病に病に病に病に

[illegible]

[illegible][illegible]

て中をうへ人なりも^くあ^らう^るも^の高生^しと^し
能^くた^しあ^むし^し能^くる^の大^き悲^しふ^の下^のの^の得^る
能^くの^のう^のに^の智^のの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
鬼^の道^を救^はせ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
と^の事^をあ^らは^しせ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
り^のの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
地^をを^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
地^をを^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る

は^のの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
を^のの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
脚^をを^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
を^のの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
地^をを^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
地^をを^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
は^のの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
つ^のの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る
と^のの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^るの^の能^くれ^る

はるをくたさる飛人を御あまふとのほろろ像
あつめみそ選してねひまのうらやう

普陀洛傳記卷之九

普陀洛傳記卷之九

十九歳東京半部世音寺を
以て寺といふ事知るは是なり

以て寺といふ事知るは是なり
今今のお移るゝと岡山で以て門傳正とて、
海の家をみねの人もりしう海世のふりかへて
つすゝと只獨をぬくは独やふ或は獨

[illegible]

此軸を乞て新^{あらた}社^{やしろ}に子を名^な乗^{のり}ふ事^{こと}ありたふ
 つたしては年^{とし}に親^{おや}疏^{はな}りもあき親^{おや}と一^{ひと}歎^{なげ}きの
 涙^{なみだ}を^{なみだ}あふりて定^{さだ}むる程^{ほど}の歎^{なげ}き悲^{かな}しみ
 らしき事^{こと}あり親^{おや}に親^{おや}更^{また}流^{なが}世^よにする事^{こと}あり
 一時^{ひととき}に身^みを^をあ^あた^たり親^{おや}生^{なま}を^をあ^ありし^しの悔^{くや}
 こよ年^{とし}齡^{なり}を^をあ^ありし^しとも^{とも}あり今^{いま}も^も死^しん
 る事^{こと}あり親^{おや}に親^{おや}に流^{なが}世^よの事^{こと}あり
 此^こ後^{のち}より^{より}悔^{くや}を^を止^{とど}めしと愛^{あい}起^{おこ}して^{して}此^こ麻^あ

城の御家までいりてありと云ふ御家不傳大士の
朋友を多く密に不傳大士と告げても水は家
を不伝の屋敷に上りていりて密に御家
にて居るを母の病を御家の御家
より知れども幼少より密に御家
の御母を密に御家の御家にて居る
密に御家の御家の御家の御家の御家の
密に御家の御家の御家の御家の御家の

城の御家までいりてありと云ふ御家不傳大士の
朋友を多く密に不傳大士と告げても水は家
を不伝の屋敷に上りていりて密に御家
にて居るを母の病を御家の御家の御家の
より知れども幼少より密に御家
の御母を密に御家の御家の御家の御家の
密に御家の御家の御家の御家の御家の

うろたへて食傷あどち死したる様なり
の難からずといふはまことなり
いふもさういふ事ごとくおぼしき通ふやんそめ
何して調へ事しよる事毒氣を中房に海
を創り希希を極め勿論毒氣はさしおとす毒
を中房に海しよる一口くはれずる様ふもさく
たふ女の死なりしとある事とも知れぬ事なり
のゆゑ高きふて是なる事なりと云ふ人と思

ミ極く多き中房に海希希を中房に海通一の
事なりと云ふ事なりと極めしと云ふ事なり
ふもさく様もふもさく事なりと云ふ事なり
うめ月の悲しき事なりと云ふ事なり
を中房に海しよる事なりと云ふ事なり
れは中房に海しよる事なりと云ふ事なり
死しよる事なりと云ふ事なり
業として命なりとも事なりと云ふ事なり

[illegible]

忘るる事あり。これハ彼王ハ女房と名乗りと並べ
 主として海客といふも家内をわすめ石塔をあらへし上
 毒ありておを殺さんとて王をなまねてさよふる事あり
 あり。女房を名乗るものと云ふやで比真あり。ゆゑに家
 老の坊より追ふぎふお名をさしおれハ物言ふ
 れと毒を仕止し市面を盗入あり。むかし毒い毒ふ
 毒あり。死し々々。お名をさしおれハ物言ふ
 毒あり。死し々々。お名をさしおれハ物言ふ

訪のくをちるきく子種と考て中人より
云ふも中人より限る千の種と考て
訪の事皆親者の大慈大悲と考て
仰と成し子親者の子の母の母を以
て母の母も子も母と考て

善院法苑卷之五

善院法苑卷之五

二平香山國語卷之五
子親者の母の母

國山源義親の北畠山天台の事
親と子親の事天台の一事子親の事
道義備の事源義親の事
此人より畠山源義親の事

降臨^{きりかへん}天王の蘇^そ儼^{げん}を以^{もつ}てひきあへりて
 如^{ごと}きのは用^{もち}を以^{もつ}て介抱^{かいほう}を以^{もつ}てひきあへり
 玉^{たま}ひ女^に十^じ日^{にち}斗^とり抱^{ほう}ふ信^{しん}名^なを以^{もつ}て月^{げつ}方^{ほう}の姫^{ひめ}子^こと
 下^{した}め何^{なん}れと云^いふも作^{つく}るはとて以^{もつ}て介抱^{かいほう}を
 以^{もつ}て以^{もつ}て出^でるも信^{しん}名^なを以^{もつ}て新^{しん}名^なの以^{もつ}て子^こと
 成^{なり}て以^{もつ}て介抱^{かいほう}を以^{もつ}て以^{もつ}て信^{しん}名^なを以^{もつ}て新^{しん}名^なの以^{もつ}て子^こと
 以^{もつ}て以^{もつ}て介抱^{かいほう}を以^{もつ}て以^{もつ}て信^{しん}名^なを以^{もつ}て新^{しん}名^なの以^{もつ}て子^こと
 以^{もつ}て以^{もつ}て介抱^{かいほう}を以^{もつ}て以^{もつ}て信^{しん}名^なを以^{もつ}て新^{しん}名^なの以^{もつ}て子^こと

源業と成候様或を執らんそう野也亦送り
 其思しそ骨を首め我敵少く誂るも其子
 と扱ふを常く誂せらるるに月々休を以て
 せしは其方候しむじふらなる官を人も
 あり又母のほめの上は道中何事なり
 立すやう人も知れらるる道中もあはれに
 付ふも其是あはれなる定業に是を敵止れ
 り習ふらん大徳の道昇進候しそらん何の

為ふ成てきや唯後世のものとて大なる事ありと云
常を能くし名もふ海山の志し一よりあくるまが
来ふ所山より谷よりわたり宋の庭を経ば急流
とも世を能くして作せむいそ政めき家名の来
と傳へむよふは山は常々龍らるるをふいとに
ふいふふり尺玉に佛を一つもあし扱はふ契
地こそ是れ紫雲の瑞光に依り此ふ所は作す所
或時老翁を人出する何ぞか観し庭をといふ

深井是をアムハ様一と云ふ
 永王阿蘇やうく何ありた所ぬーしはる
 あまんとあまなく様一と云ふ如き同
 昔振とて又知に堂所此あを重代と知ん
 店を能い飛れどもは月の介此あを重代
 と云ふ事しりて重代と此候と云ふ
 是佛の六一字の本を建立しむる重代の
 重代と云ふことあるが深井是只人あつた

牛我大少佐心と起 佐藤を寄附幾程
あく本堂創とらうといふ草堂の由とて因
本に生流中流らうと東山若水の意流初局
中興しあふと意流なる百人一首の中とて
大徳は意田とちなり奇の名人と狂言お
多くらう昔思ふとて

家唐の部の車ひのト申

ふと字は山のすむとひあり

意流なる一衆と寄とて流をあらうと
意流とてとてとて

人といふと人のくそ有ものを

意流のうとて意流のうと

御流所

野といふと山流とむとて西のうと

うといふと山流とむとて西のうと

此節をすさ山流とむとて此世のうとて

中一やと申すは延享元年の所し同所
り民も懐懐食ふて佛法を嫌ひ多仏を
さへて其の老漢なりし熱病をさへ
むろの志しとて死する二つありし
さけじと申すは飛出ると介人引め
くぬれす大さく強き火ふさるぬき
てさるも熱しは筋筋つ切するも
さへ事と止るたてと病をよき
病れハ又熱くして中ふぬれ
社のものあるはさなり病に
知る病いおそく勇男も人
持豆を持ち死す病をぬれ
て死し息の火の車の病より
とる利法病も持ちては
とる又其も同に病ある
子息の病もとるて
進けし事をしめ

病れハ又熱くして中ふぬれ
社のものあるはさなり病に
知る病いおそく勇男も人
持豆を持ち死す病をぬれ
て死し息の火の車の病より
とる利法病も持ちては
とる又其も同に病ある
子息の病もとるて
進けし事をしめ

あふ所都の飛し宇都宮の帝女登壇元久二年

八月より九月元禄大師のほろひあり 刺殺あり

或時宇都宮よりとて通りし向ふ無名入道
道生耳の眼の好月とて無名入道よりとて
現るゝとてとてかかれ無名入道を扱け宇都宮
強うう馬とてとて勇くととてとて天晴一方の
大將と何れの大敵とてとてとて宇都宮とて去
るは世の敵とてとてとてとてとてとてとてとて

本世とて敵とてとてとてとてとてとてとてとて
防ぐとてとてとてとてとてとてとてとてとて
防ぐとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
の敵とてとてとてとてとてとてとてとてとて
依りてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
何とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

母の爲に重なる病に是れ業を飯を喰ひて
 大海に流れゆく云ふ柳の母の重なる枕を食ひ飯を
 喰ひたる娘を賣りて業を飯を喰ひたる
 母とする云ふ柳の業を喰ひたる娘の
 業を喰ひたる病に重なる云ふ母の病に重なる
 母を賣りたる病に重なる云ふ母の病に重なる
 母を賣りたる病に重なる云ふ母の病に重なる

病を祈りて必し傷み年々よりよきを惜むの心は
 法外れ必ず此業に下るまじと云い丈夫なり
 事を極め終ふ令も亦ありく今今に計りてわが
 うまに是を治すもの別れとも成さうと泣かれど
 うそ曲のや詞のみく日々病し病ひたり
 をうて今ハ臨終にあつたをあの人もう
 二人は生かぬをはなれぬは方知れず
 さうしてさうして終つて成るべきなり

くましと涙と親ひきつた未年も美らき身なれ
髪の方あーふとに生れそ母の菩提を弔
まゝとて泣き二人と誓ひき切てゐると文也發
まゝ一石を必だ後世にのけられしうあめを
とく居るまゝ一やふとて美らき身なれ
ハ世ふはあふとて美らき身なれ何
ある憂國よほめらんも斗り難くは山あふ隠
くくくを能く母の菩提を弔ひきつた或時

二人は親きものほめし通夜をて親ひきつた
母の身なれ地獄とて病れぬ身なれ
何卒親き大自在大悲の法力を以て母を極
樂へ導きしとて姉妹共々哀れ
ちーに生れ無常の世に生れ親き身の内は
満ちきつたにすぎぬとて母を
母の身なれ母の親き身なれとて母を
邪人を捕縛ししとて母を

永無ありき情ある何れを悲しむに二
 の鬼のやうな是れあるはあつてはあはれ
 善哉ん^あて娘のやうな^あ善哉^あ清世の
 りあるて死したる^あ水郷の飛^あけさる
 と云いふ中^あに^あ通^ある^あ娘^あと成^あぬ^あ若^あき
 投^あて^あり^あ半^あ有^あの^あ身^あに^ああ^ある^あも^あ知^あれ^あぬ^あ
 大^あ場^あの^あ力^あを^あひ^あて^あ助^あけ^ある^あと^あ一^あ人^あに^あ死^あす^あの^あ深^あ
 三^あ知^ある^あ志^あを^あ悔^あし^あむ^あ助^あけ^あた^ある^あへ^あと^あ作^あれ^あ忽^あ

ちほ傳と見しに、歌をる井と現れしは母妙
林と見しは井の形とあり、西の方とも云ひしは
とろふ、之は常をめて見事な歌也、るのほあ
ふ師一病うりて之は常の方、ほうさふと云へり、
物なるは氣の常をるしと云ふ、自然も、之は
の常をる、いふ物なるは常をる、いふ海は、
のほあ、いふをりて母の地、いふは、
しと、いふ林と見しは、いふ海の名、いふを、いふと、いふ

[illegible]

草堂のゆきと同年少て実ふ下か散の神を
 うりゆきふの月ふ夢つ而院だらにを唱ふ
 吾う雪うしと云傳ふふの雲を少て作らありし
 龍う清むるあり

夢院詩集卷之七



奈良市東向通市町四番地

吉田安治郎

電話四百三十九番
振替大坂二一五九番

[Faint, illegible handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page.]

